

# ExtraNews

**ネパール** 「毎日停電になり、なかなか連絡することができず、報告が遅くなってすみません。」と、政情不安定のネパール事務所ラジバイ所長から久々にメールが届いた。伝統文化保存と人権擁護運動の一環で、ネワリ語などの伝統文字を教える識字学塾「リビタブグティ」を支援している活動で、同塾役員会の要請に応える形で寄付を募り、現地専門家に依頼し、2004年夏から作成を開始した伝統文字のフォントが今春完成した、との報告を受けた。これまで約2年費やしたが、この後キーボード入力が済むと、今まで手作業で行ってきた教科書作成や新聞発行などが円滑に進み、塾の発展や規模の拡大に大いに役立つそうだ。次回の報告を心待ちにしている。^^

**ミャンマー** 「井戸の回りに大きな水たまりができていたよ！あんなに喜ばれるとは本望だ。」と嬉しそうに語るのは群馬県藤岡南ロータリークラブの豊川氏だ。同クラブ5周年記念事業としてミャンマーの山村に井戸を掘る工事が大成功となり、今後は「その水でタエンデ村オリジナルウォーターを販売する」計画が進んでいる。

この事業が評判を呼び、この度群馬県沼田ロータリークラブの一行12名が4月18日からミャンマーにTMRC同国プロジェクトチーム（田代経量、小川志道、豊川一男）との合同現地調査を実施し、2005年9月に完成したザガイン州「マイトリースクール」を見学した。群馬県のガバナーエレクト（次期会長）の横山公一氏も参加しており、同クラブから併設された保健室に医薬品や備品が寄贈された。19日の寄贈式では職員・生徒に熱烈的な歓迎を受け、一段と設備が充実したことを祝った。

当会調査班の報告によると、生徒は200人以上、他地区からも希望者が多数入学し、1年も経たずにこの地方で1番良い学校との評判を得ているとのこと。特に、保健室は生徒の保健管理だけでなく、地域住民の診療が行われ、看護婦さんにより、まわりのハンセン病患者の治療も行われているとのこと知って、当会の趣旨が発揮されていることを確認した。

同クラブ一行は充実した現地調査を終え20日無事帰国した。今後さらなるミャンマーとの友好交流に期待。^^

# ロンゾークラブ 9



T・M良薬センター ニュースレター

特定非営利活動法人T・M良薬センター事務局



〒371-0852  
群馬県前橋市総社町総社1024  
(Tel&Fax) 027-254-2325  
(E-mail) office@tmrc.jp  
(HP) www.tmrc.jp

ミャンマー / ベトナム / スリランカ / カンボジア /



ニュースレター第9号

平成18年5月17日

T・M良薬センター事務局

Tel・Fax：027-254-2325

E-mail：office@tmrc.jp

http://www.tmrc.jp

表紙写真：カンボジア・プレピエイル村の子供たち

## ミャンマープロジェクト

### 整体事業

2005年6月に小川光星会員（整体師）がマンダレーに駐在し、市内の日本語学校内にオープンしている整体教室で、12月に第1期卒業式が行われ、受講生124人中48人が卒業した。3月には第2期の卒業式が行われ、受講生97人中47人が卒業し、その中には漢方医として活躍するものや、新たに整体院を開業するものなど整体の職業訓練を受けた住民が各地で活躍している。また、受講生の中で成績優秀な5人は指導員養成コースとして、同教室と同時に開いている整体診療所（小川光星所長）で実際に利用者に施術しながら経験を積み、小川駐在員帰国後の次期指導者として研鑽に励んでいる。同診療所は利用者が600人を越え各地で評判を呼んでいる。



盲学校紹介に整体コースが掲載

2006年1月から社会福祉省の依頼を受け、ヤンゴン市内の同省管轄盲学校での整体指導を開始した。全国の福祉施設からマッサージコースの講師や利用者が受講に集まっている。同校から14人、同分校から2人、ヤンゴン聾啞学校から4人、ザガイン盲学校より6人、マンダレー盲学校及び聾啞学校より2人、18歳未満男子職業訓練所より2人、18歳未満男子犯罪者並びに路上生活者保護施設より2人、18歳未満男子孤児院より2人、18歳以上女子職業訓練所より2人、18歳未満女子犯罪者施設より2人、18歳未満女子孤児院より2人の合計40人。マンダレーから指導員コース生とヤンゴンの官舎に移り、指導を始めた小川駐在員は当初「各地から技術習得にきているが、各施設に戻って利用者を指導するにはまだまだ経験不足が否めない」として、長期的指導が必要だとの見通しを示したが、4ヶ月間にわたる熱心な講義の末、同年4月には指導員6人を含む38人が卒業となり、第1回目の社会福祉施設での集中講義は大きな成果を残した。今後も同省と協議しながら事業を展開していく予定。



### 放置自転車を贈る



日本ミャンマーカルチャーセンター（略称 JMCC、東京都豊島区）からの紹介を受け、ミャンマー人僧侶ウ・カリヤーナ氏の放置自転車をミャンマーの学生に寄贈する活動の協力依頼を受けた。同国では多くの子供達が登下校に難渋している中、同氏は2005年1月から母国の学校に自転車を寄贈するため両国を行き来しながら輸送費の寄付を集めていたが、自治体からの受領や輸送などに困難し、協力団体を求めていたのである。

12月14日、川崎市役所から放置自転車400台の無料払い下げを受け、貿易会社MTMジャパン（東京都豊島区）の指導により全車解体作業を実施した。会場の神奈川県平間自転車保管所では、日蓮宗神奈川一部社会教化事業協会と青年会から約20名が応援にかけつけ、澄み渡る空の下一斉に作業が開始された。多数の自転車を海外輸送するにはコンテナに積みやすくするためにまずカゴをドライバーではなく、ハンドルを六角で緩めて前輪と平行に曲げる。そしてペダルをスパナで叩いてはずし、施錠された鍵を取りはずして1台完成という手順だ。参加者全員慣れない作業に、自転車のネジがさびているため四苦八苦するが、専門家の指導を受けながら少しずつコツをつかんでくると、各々得意の作業がわかってくる。11時の小憩の際相談し、カゴ、ハンドル、ペダルと三つのエリアにわけ作業の効率化を図ると、みるみる内に平らに解体された自転車が増えていった。午後1時を回り約250台終わったところで昼食をとり、作業を再開すると、参加者にも余裕が出てきて、冗談や笑い声が飛び交い、夕方遅くまでかかる予定だったが、午後2時半に全400台の解体を終えた。作業終了にあたり本事業の発起人であるウ・カリヤーナ氏が挨拶をし「子供たちがとても喜びます。皆様ミャンマーに来てください。」と感謝の辞を述べた。



自転車は翌日コンテナに積みこまれ船便でタイへ発送、そこから陸路でミャンマーに届けられた。兼ねてからの念願がかなった同氏は一足先にタイへ入国し、船の到着を待った後、自転車と一緒にミャンマーへ帰国したとのこと。現地の写真が届いたら追って報告したい。

## ベトナムプロジェクト

### 新 学校法人「日越情報語学センター (VJILC)」

2004年5月から運営に参入し、経営の立て直しを図っていた「ハノイ日本語教育人材開発センター(略称 JLHC、ゲンフォン校長)」では、2005年6月から事務と経理を把握するため当会から清水智子さん(24)を派遣し、営業に尽力した結果、生徒数が増えだし、秋期には100人を越えた。規模の拡大に伴い、以前のクラス形態を維持することが困難になったため、プロジェクトチームにより、ビルを移り体制を一新し本格的な教育事業に乗り出すことになった。

「ハノイ日本語教育人材開発センター」の名義を返還し、12月よりハノイ市教育局に新学校法人「ベトナム日本 IT・外国語センター」の認可申請を行い、12月20日許可が下りて登録を完了した。4月1日からゲンフォン TMRC ベトナム事務所長が運営している(株)「日本ベトナムソリューションズ」が同校の経営事務を担当し、同社の入っている4階建てのビルを借り、移転し、4クラスで春期授業を開始し、順調に進展している。

# VJILC

#### 経営主体 理事会

理事長：小野文瑛  
専務理事・校長：ゲン・フォン  
理事：町田順文  
理事：荒居養雄  
監事：清水海隆

#### 経営事務

(株)VNJP SOLUTIONS(代表取締役社長 ゲン・フォン)  
Add. 3F,79Lint Lang, Ba Dinh, HANOI, VIETNAM

**職員** 小池直代、清水智子、ゲン・トワン、アイーン

**支援団体** NPO 法人「T・M 良薬センター」

#### 連絡先

Add.: So79, Linh Lang, Q, Ba Dinh, HANOI, VIETNAM  
Tel.: (84) 4766-5361  
Mail.: info@trungtamtokyo.com

### 現地駐在員からのお便り

ベトナム・ハノイに駐在している清水智子さん (VJILC職員)

いま、VJILCのハノイ校 Trung tam tieng Nhat VNJP は生徒数が90名です。学生が夏休みに入ると、日本語の勉強を始める人が多いので、これからが大忙しです。

現在、5クラスあります。月、水、金が3クラス、火、木、土が2クラス、今週の水曜日に、もう1クラス始まります。多くの生徒が日系企業で働いていたり、就職を希望しています。また、国費留学する方や自費留学の方も、準備段階として、このセンターで日本語の基礎を学んでいます。

現在、職員は3名 TOANくん ANHさん、私です。その他に先生は、ベトナム人が5名、日本人が2名、日本語を教えています。基本的に、ベトナム人の先生は文法を週に2回教え、日本人の先生は、週1で会話を中心にみえています。

ちなみにTOANくんは、今テスト期間で大忙しです。来年の4月を目標に日本留学の為、日本語も勉強しています。ANHさんも、同じく来年4月を目標に、事務の仕事の合間に、一人日本語を勉強しています。今年中には、日本語能力試験対策クラスをつくれることを目標にしています。

職員らとVJILCハノイ校  
正面にて撮影

後列右から3番目が清水さん



## スリランカプロジェクト

### 津波被害復興事業

2004 年末のスマトラ沖大地震による被害を受けたスリランカから支援要請を受け、2005 年 3 月にプロジェクトチームを結成し被災地を視察してから 1 年が経過し、長期的な復興支援活動が次々と実行し始めている。

2005 年 9 月に日本で勧募した義援金で東沿岸部パーナマに教育施設が完成すると、破壊された沿岸部の漁村から施設を再建する希望の声があがる中、日本各地を回り、スポンサーを募集したところ数団体が名乗りを上げた。12 月には日蓮宗静岡中部宗務所が南沿岸部マターラで再建工事が決定し、2006 年度中に落慶の予定。2006 年 2 月には（宗）本成寺（茨城県古河市）が、3 月に日蓮宗新潟県東部宗務所がそれぞれ町村復興の再建工事を決定し、本年度落慶に伴いスタディーツアーを計画している。また静岡市仏教会も 1 カ所再建を検討している。この他日蓮宗宗務院の継続的な援助によりスリランカ被災地で支援活動を続けてきた。しかし、「この度の大災害の復興には多くの友好国の長期的な援助が必要だ」とする文化情勢・国家遺産省大臣の意見通り、未だにテントで暮らし、NGO 等の援助なくしては生活が困難な被災者が多い。今後も義援金を募集したい。

### ウバ州バズラ地区教育振興事業

四方を紅茶畑の斜面で囲まれた中央山岳地ウバ州バズラ地区では TMRC スリランカプロジェクトカウンターパートナーのダンミッサラ氏が手掛けている教育振興事業が順調に進んでいる。子供たちが 2 時間かけてふもとの学校まで通っていた不便なこの山村に、2005 年春、当会の支援で完成した「スリーダンマーナダ・スクール」は幼稚園から短大卒業までの資格を得られる学校として、今まで学校にさえ通えなかった多くの子供たちが集まってきている。

以前は 20 人程の子供達に教える“寺子屋”だったものが、コンクリート作りの 2 階建ての学校に変わり、1 年経過した現在は 8 歳から 20 歳まで 130 人の生徒が朝 7 時 45 分からお昼 2 時まで日々勉強に励んでいる。先生はみな国から派遣された公務員。各地政府の学校が教師不足で悩んでいるなか、寺院で運営する学校では僧侶監視の下怠慢が許されないため、16 人の先生はみな一生懸命教鞭を振るっているとのこと。「5 km 離れた隣村から通っている子もいる。4 月に中学入学試験が終わったのでさらに生徒が増える予定。もう 1 棟教室を増やしたい。今年は図書館も作りたい。」とダンミッサラ校長は語る。夢は広がる。

## カンボジアプロジェクト

### 現地視察へ

内戦で大打撃を受けたカンボジアの復興支援のため、2001 年 11 月から同国で農業適正技術支援を続けている国際 NGO「AIM 国際ボランティアを育てる会（福岡県甘木市、代表井本勝幸）」と協同しながら当会プロジェクトチームを結成し、作田光照、新井恵裕両会員が 2005 年 3 月 5 日から 9 日、現地調査を実施した。出発の際兼ねてからプールしてあった国内で収集した衣料品を 20Kg ずつ持参し、山村訪問中に住民に配布した。

貯水池「ブダ池」

AIM は、内戦終了後 10 数年経過し目覚ましい復興を遂げる都市部に比べ、当時の戦乱や虐殺で未だに荒廃した農村部に着目し、農民の自立を目的として、伝統水車の設置など農業技術の移行をカンボジア全土で展開している。

調査班は AIM が支援しているタグネン村とプレピエール村を訪問することになった。首都プノンペンから自衛隊が手がけた国道 6 号線を 6 時間走り山地へ、さらに道なき道を 2 時間揺られると 50 m<sup>2</sup>ほどの大きな溜め池が出てきた。「有料の水路をひくことができず、雨水を使用しているのを見かねて貯水池を作った。」と AIM 職員は説明する。しばらく行くと今度は米を備蓄した「米銀行」を見学。種籾を貸し出し、収穫の数%を飢饉に備え回収しているそうだ。「当面の心配をせず、安心して暮らせる。」と住民に大変評判が良いとのこと。村を訪れた一行は衣料品や作業手袋などを贈り現地との交流を深めた。「子供たちは裸に T シャツ姿で元気いっぱい。持参した衣料品を取り合ってケンカしているところへ母親が怒鳴る。女性と子供のパワーに圧倒されました。次回は沢山持参して、一人一人に手渡したいです。」と、作田会員は苦笑い。今後も外務省認定の AIM を窓口継続的な支援が期待できそうだ。

日本で放置自転車を解体・発送し、現地で組み立て直接寄贈するまで一貫して行うスタディーツアーも計画中。

衣料品を手渡す新井会員

